

それから一週間が過ぎた。

毎週末の決まり事のごとく、僕は孤児院こじいんに向かっていた。週末の僕の朝は早い。

まだ眠りから醒さめたばかりの街並みはまるで賑にぎわっておらず、むしろさめざめとしているようにも見えた。

「……こんな朝早くから一体どこに向かうつもりなんです  
か」

ふああ、とあくびを漏もらしながら、イレイナは僕の横で文句を垂たれる。

「子供たちに夢を持たせに行くんだよ」

「私は今すぐ夢を見たいです……」

ここ一週間、魔法を使えなくなっただイレイナは魔女まじよらし

い格好かつこうをやめて、ただの私服を着て仕事をしてきていたわけだけれど、今日のこの時間に限っては、魔女らしいワンピースを着てもらっている。

「……なんか一週間ぶりにこれを着るとコスプレみたいで  
す」

まあ実際、魔法のないこの国においては確かに紛れまぎもなくコスプレみたいなものだけれど。

「これから孤児院の子供たちに読み聞かせをしに行くから、  
脱がないでね」

「……何を読み聞かせるんです？」

「ん」

僕は手に持っていた本を掲かかげてタイトルのところに指を

置く。好きな本のタイトルを口に出すのは恥ずかしいからね。

『二ヶの冒険譚』ですか「イレイナは目を丸くしていた。

「それ、私も持ってますよ。全五巻」

そして彼女はバッグから五冊全部取り出して、したり顔をしてみせた。

ほんとに全五巻あった。

幻まぼろしの……四巻と、五巻が……！

「え、ちよつと。それどこで買ったの！」

「十数年前にとっくに出てましたが」

「マジ？」

「マジです」

「……借りてもいい?」

「もちろん」彼女は柔らかくやわ笑って、僕の手の本を置いた。  
 「特に四巻は楽しめると思っていますよ。この国のことが書いてありますから」

「……? どの国のこと?」

「この国って、確か領域都市りょういきとしクラウスレイン、ですよね」

「そうだけど……」

「ネタばれしちゃいますと、主人公は四巻の序盤じよばんでこの国に訪れて、一年間過ごします。四巻序盤から中盤までずっとこの国での話を綴つづっています。ご存じの通り、この旅日記は実話を元にして書かれたものですから——まあ、この国の名を知ったときは本当に驚きましたよ」

「……………」

「本の著者はこの国で、不思議な女性に出会って、その人の元で一年間働いていたそうですよ。それがどういうお店かは——まあ、読んでれば分かると思います」

「……………」

「魔法が使えなくなつた……………なんてことは一切書いてないんですけどね。すっかり騙だまされましたよ……………。そういう国だと知っていたら、もう少しうまくやり方でお金を稼かせいでいたのに」

「……………」

「ちなみに主人公は不法入国したみたいですよ。ワイルドですね」

「……………」

もしかして三巻までしか持ち込まれていないのって、そういう事情？ 不法入国した魔女の物語が国内で売られていたらいろいと不味まずいから、四巻は持ち込み拒否にされていて、四巻がないから五巻も持ち込めないということ？  
え？

そういうことなの？

……………。

大人の事情で不都合があつたせいで需要じゅようあるのに見て見ぬふりして供給きゅうきゅうサボるとかこれもう商売の破綻はたんじゃない？ やはり読者をなめておられるな？

「しかし思った通り、ここは楽し気な国ですね。一年間く

「いいいても構わないかもしれませんが」  
歩みを進め、彼女は僕の前に出た。

僕は、

「ねえ、というか、その魔女が一年間働いてた店って——」

彼女の背中に、問いかける。

イレイナは振り向く。

「リリエールさんは本当に不思議な女性ですよね」  
そして笑った。

「彼女と一緒にいたら、もしかしたら面白いことと出会えるかもしれないね。本の主人公みたい」

——ただ、彼女を迎えたかっただけよ。

懐かしそうに語っていたリリエールの言葉が、ふと頭をかすめた。

街並みを眺めながら僕の前を再び歩み始めたイレイナの瞳は、まるでその時のリリエールの様子と、そっくりだったから。